東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

ナイロビ日本人学校における日本人会とPTAの協力実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤澤,俊介 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174200

ナイロビ日本人学校における日本人会とPTAの協力実践

前ナイロビ日本人学校　教諭
岩手県一関市立山目中学校　教諭　藤　澤　俊　介

キーワード：在外教育施設，コミュニティー，小規模校，厳しさ

１．はじめに

ナイロビ日本人学校に赴任した3年前。ナイロビの風土や生活に慣れること，初めての小規模校，小学校の授業に戸惑っていた時期，日本人会や保護者の方々との交流が非常に支えになった。その中で，自分が実践してきた中学校教員生活と日本人学校との違いを感じ，お互いのメリットを比較する機会が多くあった。日本人会や保護者との交流の中でもよく話題になり，今から紹介する実践をするに至った経緯を紹介したい。

２．ナイロビ日本人学校の児童・生徒の実態

(1) 日常生活の点から

ナイロビ日本人学校の生徒は，様々な国を経験しており，文化や教養，思想，習慣が小規模校にもかかわらず多種多様である。また，海外生活が長いためか，自己主張が強い生徒が多い。そのような環境の中で，お互いを尊重し合いながら生活をしている点は，日本に住んでいる子どもよりも国際的な感覚を持っているといえる。ナイロビ日本人学校は，登下校ともにほとんどの生徒がスクールバスでの移動となっている。そのため，中学部の生徒が小学部の児童の面倒を見るのが当然となっていて，昔日本でよく見られた地域の子ども達のコミュニティーが自然形成されている。そのためか，低学年での他に対する攻撃的な口調からのけんかは見られるものの，学校全体としてはほとんど無用な争いやけんかが見られることはなかった。学年間の枠も気にせず，様々な学年の子ども達で遊ぶ姿もよく見られた。この影響からか，週末は，数家族単位でスポーツや旅行などレジャーを楽しむ子ども達が多かった。このように，日常から子ども達の交流の深さがわかる。

(2) 学習面の観点から

学習に対する取り組みも多種多様であった。各家庭の方針も違っており，家庭学習の取り組みなどは，差が見られた。そのため，授業での学力差が指導の課題の一つになっていたが，人間関係が良好で深いのも手伝い，教え合い学習でカバーすることができた。また，主要言語が違うため，日本語による授業が困難な児童もいたが，教員が促すことによって，周囲の児童によって翻訳して教える姿などがあった。しかし，基本的に他の意見を聞こうとするのではなく，自分の考えを述べることに気持ちが傾く傾向がよく見られた。前節に上げた人間関係とは別に，個それぞれが持っている主張を述べることが学習においては優先されることがよく見られた。

(3) 保護者の観点から

保護者の一番の関心事は，子ども達の良好な人間関係の構築だったと捉えている。私自身の交流や学校アンケートの結果などからその思いが伺えた。その中で，この良好な人間関係が構築されていることに満足はしているものの，この環境が特異であり，日本などに帰国して多人数の中に移ったとき，どうなるのであろうかという不安を抱えている保護者の方も多数いた。40名前後で小学1年生から中学3年生までいるこの環境は確かに特異であることは間違いなかった。かといって，この環境を打破することはできない。その点をどう子ども達に体験させられるか，感じさせるかという点でよく保護者の方々と話をした。この点は，本県の小規模校の保護者も抱く悩みである。今の環境が良好なだけにギャップに苦しむ可能性は大いにあるからだ。

(4) 日本人会の観点から

長くナイロビに滞在されている日本人会の方々とも話をする機会が多かった。そこで，ナイロビ日本人学校の児童・生徒に対する思いなどを聞いたところ，もっと様々な体験をさせてあげたいとのご意見が多かった。子ども達の成長には，折に触れ，運動会，学習発表会等の行事でしっかりと実感して下さっていた。それを踏まえてのことであるので，厳しさという経験であろうと感じた。

3．日本人会とPTAと学校の連携による実践

(1) 企画までの経緯

当時，PTA 会長であった保護者の方と 2010 年の暮れのホームパーティーで 1 年間の子ども達の成長を語り合った。その中で，競り弱い子どもが多いことが上げられた。子ども達は学校や年齢，性別を問わず，有志で子どもサッカーというサークルに入っている。日本人学校の生徒も多数所属している。しかし，勝利にほど遠い状況であった。0 − 0 から，1 点でも取られるとなし崩しに取られてしまう傾向が見られた。しかし，子ども達は練習に励んでいるものの，週 1 回ペースでの練習。さらに，相手は地元ケニアの子ども達が多数集まりその中から選手として選ばれているチームや諸外国のチームはほとんど中学生世代でチームを構成している。比べて本校の生徒は，小学 3 年生からチームに入れており体力差は歴然としていた。子ども達の目線で考えても競ることに強くなるためのトレーニングは難しいと感じた。そこで，サッカーは継続しつつも，新たなスポーツで子ども達に競り合う苦しさやその中で得られる達成感を味わわせようという結論至り，日本人会にも協力を仰ぎやすい，ソフトボール大会を企画しようと決まった。

(2) 開催までの経緯

PTA 会長であった保護者の方と，私をはじめとする学校職員で協力して，開催まで動く運びとなった。PTA 会長さんは，次年度（2011）から学校運営委員長（日本でいう教育長に該当以下運営委員長）になられていた。運営委員長は，日本人会の幹事会にも出席するため，日本人会でのチームの呼びかけや予算，日程の調整にあたった。日本人学校は，実際の日程調整やルール策定，子ども達のハンデ作成。子どもチームの練習運営などを行った。その結果，大人チームは 3 チーム。子どもチームが 1 チーム結成され，翌年（2012.1）に行われることが決定し，各自練習試合や練習をして大会に臨むこととなった。

(3) 実践後の成果

このソフトボール大会は，日本人会ソフトボール大会と銘打たれ 2011 ～ 2012 開催された。2013 も開催予定である。子ども達の熱烈な要望のためである。これも 1 つの成果といえるであろう。

2011 のソフトボール大会は，ハンデをつけて試合を行った。4 チームトーナメント式で行い，準決勝は勝利，決勝は大敗した。しかし，準優勝したものの子ども達に満足はなかった。そこで出た一言は「ハンデ無しで勝ちたい。」であった。ハンデ無しの厳しさを説いてもその意志は固く，翌年はハンデ無しで挑むこととなった。これは，企画した運営委員長と学校の目標としたことでもあり，大変大きな成果が得られた。

2012 のソフトボール大会は，ハンデ無しで行われた。昨年度同様に 4 チームトーナメント式で行われた。準決勝は敗北，3 位決定戦は大激戦の末，16 − 15 で勝利した。このときの子ども達は，大興奮であった。昨年度より成績は下がったものの，本物の勝利に酔いしれていた。真剣に戦うことの楽しさ，競り合いの苦しさ，勝利の達成感を全て味わうことができた大会であった。

2012 の大会開会式風景

４．2011～2012の児童・生徒の変容

(1) 学校生活での変容

ハンデ無しの勝利を求めるようになってからは，土曜日に行われる週に1度の練習だけでなく，放課後が使える日や昼休みなど時間を惜しんで練習をする子どもが増えた。また，家庭に帰ってからも素振りなどをして自主練習に励む子どもも増えた。そのため，家庭学習や宿題などもきちんとやる習慣が身につき，ソフトボール大会に参加した児童生徒は，あらゆる場面で一生懸命に取り組む姿勢が強化された。これは，中学校における部活動指導の効用と合致している。子ども達が，勝利という目標を真剣に見据えた結果であり，それに真摯に取り組んだ子ども達の変容と考えられる。ナイロビ日本人学校の児童生徒会運営も人数が少ないながら，行事の企画などを自主的に運営できるようになり質の向上が見られた。また，仲がいい集団でもあるため，ソフトボール大会に参加していない子どもも参加して鍛えられた子ども達に引っ張られ，よりいっそう明るく元気になり，11月に行われた南西アジア・アフリカ校長会（ナイロビ日本人学校・幹事校）では，挨拶などで高い評価をいただいた。

(2) その他の変容

学習などの成績やスポーツなどへの取り組み，記録にはない伸びが見られた。前節にも上げたとおり小規模校特有の染まりやすい雰囲気が良い方向に出たため，みんながあきらめず最後までやり通すことができるようになったためと考えられる。学習でもすぐに分からないといわず，考えるようになった。また，子どもサッカーにおいても2012に初勝利を手にした。あきらめない子どもが増えたことで成績上昇につながったと総括している。

５．まとめ

(1) 在外教育施設と小規模校

世界に数ある在外教育施設でも，アフリカや南西アジアは小規模校が多い。小規模校のメリットは，保護者や先生達が子ども達を深くみられることであると考える。しかし，分かりすぎるが故に過保護に陥りやすい傾向がある。よって2章3節で述べたような悩みが生まれると考えられる。そこで，それらをカバーするために本校では，スポーツを通しての自立と厳しさの体験を実践した。保護者も後方支援という形で直接は口出しはせず，むしろ敵となって子ども達を支えていた。このような取り組みが小規模校のメリットを生かし，デメリットを克服するに至った経緯であると考えている。すなわち，親の字のごとく，「見守る大人」に徹したことが成果に表れたのだと総括する。

(2) 実践記録について

今回の取り組みにあたり参考にしたのは，関わって下さった大人の実践，経験に他ならない。文献からの知識ではなく，ケニア，ナイロビに暮らすまでに培ってきた皆の英知を結集し，実践したことに価値が高いと感じている。理論も大切であるが，大人の熱こそ子ども達にとって最大のエネルギーとなることも今回の実践で実感できた。説得には，様々なアプローチが存在する。権威によるもの，例えによるもの，実践によるもの。様々あるが，人が納得をして，継続をして行動できる説得は何か。子どもにとって一番心に響く説得は何かを実証してくれた点においてもこの実践は，貴重であると考える。大人が真剣に子どもを考え，場を作り，それに呼応して子どもが一生懸命に取り組む。このシンプルな理論がこの実践にはあった。そのため，この実践記録をあえて，文献によらず，関わった方々の言葉や行動のみでまとめるに至った。

(3) 次へつなげるために

この実践記録をどなたが見てもいいようなものにしたいと考えて執筆した。ナイロビには，コミュニティーが存在した。これが1つのキーワードとなる。日本でも海外でもつながるキーワードであろう。後は，皆さんの周りにある課題と照らし合わせて協力して子どもの教育にあたることこそ次につながる提言になると考えて終わりとする。